

短 報

ソーシャルワーカーの教育養成に関する国際比較 －米国・英国・日本の学生の持つ価値観の違い－

井上信次*¹ 熊谷忠和*¹

要 約

本稿の目的は、米国、英国、日本でソーシャルワークコースに在籍する学生を対象に実施した質問紙調査を基に、コースの選択理由等の実態や学生らのもつ諸価値を明らかにすることである（以下、米国、英国の2つの国を他国とする）。本稿は、筆者らが行っている、（医療）ソーシャルワーカー（以下、SWr）の養成に関する国際比較研究のための基礎的研究に位置づけられ、今後の本格的な研究のための布石である。

本調査において、SWrの専門職課程に所属する各国の学生を比較したところ、他国の学生は、他国の学生より将来、SWrになることが社会への貢献につながり、またそれに満足を得ることがわかった。また日本の学生は、他国の学生よりもSWrに対する役割モデルが欠如している可能性も示唆された。

1. 緒言

本稿の目的は、米国、英国、日本でソーシャルワークコースに在籍する学生を対象に実施した質問紙調査を基に、コースの選択理由等の実態や学生らのもつ諸価値を明らかにすることである（以下、米国、英国の2つの国を他国とする）。本稿は、筆者らが行っている、（医療）ソーシャルワーカー（以下、SWr）の養成に関する国際比較研究のための基礎的研究に位置づけられ、今後の本格的な研究のための布石である。

さて、「社会福祉士及び介護福祉士法」（昭和62年5月26日法律第30号）は、より実践力のある社会福祉士の養成を行うために平成24年度から改正施行される（平成19年12月5日法律第125号）。社会福祉士養成カリキュラムはいわゆる「新カリキュラム」として、時間数、内容とも大きく教育内容をかえる。その改正に対応すべく、例えば、日本社会福祉士養成校協会は相談援助演習や現場実習の教員用のテキストを作成するなど^{1,2)}、社会福祉士の「質の担保」のために、職能団体が様々な事業を行っている。

このように転換を迎えた日本のSWr教育が、戦後、GHQ（General Headquarter）やCIE（Civil

Information & Education Section）の指導や勧告によって進められた「社会事業学校教育基準」（1947年）に基礎を置くことは周知の事実である。それ以降、社会福祉に関する教育は、日本の社会的、文化的状況に影響を受けながら現在に至っている。では、現在の日本のSWr教育は、社会的、文化的状況に対して真に適合的であろうか。またSWr教育は、それを受けようとする学生の状況にふさわしい環境をつくり、また将来の職業選択において明確なビジョンを提示しているのであろうか。もし日本社会の中で、SWrに対する明確な位置づけと役割が付与されているならば、SWr教育において、卒業後の進路である「出口」は明確になるであろう。しかしながら職能団体主導で、近年、啓発的な意味を持つ「ソーシャルワーカーデー」が制定されたことは、「出口」が明確でないことの証左ではないか。更に「出口」が明確でないのであれば、「入口」である入学段階での大学選択、コース選択もまた曖昧になる可能性があるといえよう。このような現状を解決する手がかりとして、筆者らは、SWrの養成に関する国際比較研究を行い、社会的、文化的な状況に適合的な教育のあり方を模索することにした。本稿では、その端

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
（連絡先）井上信次 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail : inoshin@mw.kawasaki-m.ac.jp

緒として、SWrコースに所属する大学の学生がもつ「入口」「出口」の捉え方を明らかにする。

さて、ソーシャルワーク教育に関する国際比較は、過去しばしば言及されてきた。例えば、日本社会事業大学社会事業研究所³⁾はアジア地域を中心に英国を含めてソーシャルワーク教育を比較した。そのほか、平山⁴⁾や寶田⁵⁾のように海外のSWr教育を論じるものもあるが、紹介の域をこえてはいない。横山⁶⁾はSWr教育を研究する上で国際比較をすることの意義を主張しているが、実際、本格的な比較研究はあまりない。これらはカリキュラムの国際比較研究を行う上で生じる困難さに因るところが大きい。たとえば真鍋⁷⁻⁸⁾が指摘するように、国際比較調査では文化の差異に伴うコーディングや解釈が非常に困難であり、方法論上、様々な問題を解決する必要がある。代表的な国際比較調査である世界価値観調査 (World Value Survey) は欧州価値観調査 (European Values Study) 以降、1981年、1990年、1995年、2000年、2005年と実施された。当該調査の報告をみると⁹⁾、調査時期や年齢等の属性の不一致はさほど考慮されていない。これは社会調査を取り巻く環境が国によって大きく異なるということ、性別、年齢を考慮した層化抽出が困難であることに因ると考えられる。

SWr教育に限定すると、日本におけるSWr養成のための専門職教育が海外ではどの課程と同等であるかを考慮する必要がある。たとえば、社会福祉士の実習では学部段階での180時間の実習が法律上必要だが、大学院では規定されていない。そもそも社会福祉士養成の多くは大学院ではなく学部教育のなかで完結している。一方、米国、英国では大学院での実習が義務づけられている。このことから学部教育のみを比較することは妥当でない可能性がある。本稿は、今後必要とされるであろうSWr教育の国際比較研究を行うにあたって必要な方法論の模索も包含している。

2. 方法

2.1 調査対象

調査協力が得られた、米国のA大学、英国のB大学、及び日本の中四国地方にあるX県のC大学、関西圏にあるY県のD大学、九州・沖縄地方にあるZ県のE大学、F大学、G大学においてSWrを養成する大学の学生を調査対象とした。海外の大学は中規模大学から抽出した。日本の大学は、中規模大学で、同規模大学であることを条件に、都市と地方が混在するように抽出し、A大学及びB大学の学生は、カリキュラム及び調査協力が得られた学部の都合で主

に大学院生が対象となった。A大学及びB大学の学部学生も調査対象としたが今回の調査では十分な協力が得られなかった。そのため学部学生に関しては、その他の大学を含めて2010年から2011年にかけて、追加調査として再度調査を行うことになっている。日本の各大学は、学部学生が対象であった。配票数、回収数、回収率は表1に示した。

表1 回収率

	配票数(部)	回収数(部)	回収率(%)
米国	132	132	100.0
英国	61	61	100.0
日本	1269	1123	88.5
合計	1462	1316	90.1
(日本の内訳)			
X県	536	412	76.9
Y県	400	383	95.8
Z県	333	328	98.5

2.2 調査方法

米国及び日本の各大学では、筆者らが現地へ赴き、調査対象者に直接説明した後、講義中に、集合調査法により、配布、回収を行った。一部、日程の都合上、筆者らが直接説明できなかったが、各大学の研究協力者に協力を求め、研究協力者による集合調査法により、配布、回収を行った。英国の大学では、調査票を一括で郵送した後、調査協力者が配布、回収を行った。調査期間は、2010年6月上旬から2010年の7月末であった。

2.3 質問項目

調査票は、基本属性として、回答者の年齢、学年、出身地、就労経験、将来の希望進路を中心に尋ねた。次に、大学を選択した理由として13項目、ソーシャルワークコースを選択した理由として19項目、様々な行動に対する価値を尋ねるものとして10項目を、それぞれ「1. 当てはまる」から「5. 当てはまらない」までの5件法で尋ねた。それ以外には、政治的信念、宗教的価値観等を尋ねた。基本属性、大学及びソーシャルワークコースを選択した理由は、筆者らと各大学の研究協力者らとが議論を行い作成した。それ以外の質問項目は、世界価値観調査の中のいくつかの調査項目を用いた。

他国での調査票はすべて英語によって実施した。調査票は、両国の調査協力者との数度のやりとりとバックトランスレーション (Back Translation) によって、英語版と日本語版の差異を最小限するように調整した。

2.4 倫理的配慮

調査に際し、本調査の協力が自由意志に基づく任意の調査であり、学術的な目的のみの使用であること、データはすべて統計的に処理されること、回答者が特定されないことを示す調査依頼文の添付、及

び口頭による説明を行った。本調査は川崎医療福祉大学倫理委員会（承認番号211）からの承認を得た。

2.5 分析方法

本稿では、最も基本的な実態のみを把握することを目的としているため、独立変数として米国、英国、日本という国のみを用いた。従属変数として大学を選択した理由、ソーシャルワークコースを選択した理由及び様々な行動に対する価値を尋ねた項目、計42項目を用いた。尚、すべての変数に関して、特に米国及び英国での回収標本が少なかったため分析毎にペアワイズによる欠損値の除去を行った。その結果、分析により対象標本数が異なる。以上の分析では、従属変数を間隔尺度と見なし、すべて一元配置分散分析（one-way ANOVA）を用いた。分析における有意水準は $p=0.05$ を基準にした。多重比較（下位検定）にはTukey HSDを用いた。この分析にはSPSS Statics19.0J for Windowsを用いた。

表2 回答者の属性（性別）

		性別		合計
		男性	女性	
国	米国	24(18.2)	108(81.8)	132(100.0)
	英国	9(15.0)	51(85.0)	60(100.0)
	日本	464(41.5)	654(58.5)	1118(100.0)
合計		497(37.9)	813(62.1)	1310(100.0)

注1) 単位は人。括弧内の数字は%。

注2) 無回答者は6人。

表3 回答者の属性（年齢）

	平均値(歳)	SD
全体(n=1,306)	21.24	5.21
米国(n=130)	28.63	7.62
英国(n=59)	30.81	9.37
日本(n=1,117)	19.88	2.74

3. 結果

3.1 回答者の属性

回答者の性別を表2に示した。女性の割合が62.1%であり、すべての国において女性の割合が多かった。回答者の年齢を表3に示した。全体としては年齢±SDが、21.24歳±5.21であった。ただし、米国、英国がそれぞれ28.63歳±7.62、30.81歳±9.37であるのに対して、日本は19.88歳±2.74であった。これは、第1に他国の調査対象者が大学院生であったこと、第2に他国では、日本とは異なり、高等学校から時間を経ずにして直接大学に進学することが必ずしも一般的でないことに因ると考えられる。詳細な分析をする上では年齢をコントロール変数として調整、もしくは同じ年齢層のみに限定して分析す

る必要が少なからずあるが、同年齢層に限定した場合、分析対象がきわめて限定された。そこでこれらの分析は、今後の追加調査での追加標本でもって分析することとし、本稿では年齢の違いを分析から除外した。

3.2 従属変数の概要

3.2.1 大学を選択した理由

結果を表4に示した。特に「望んでいた学びができると思った」、「本当はこの大学には入りたくはなかった」の平均値±SDが、それぞれ1.90±0.92、4.06±1.15であり、全体的には目的意識をもって大学を選択していた。また「私自身の判断でこの大学を選んだ」は、1.78±0.96であり、学生は主体的に大学を選択していた。

3.2.2 ソーシャルワークコースを選択した理由

結果を表5に示した。特に「社会に貢献できる仕事をしたかった」の平均値±SDが、1.92±0.96であり、学生は社会との関係性を重視して当該コースを選択していた。また「ソーシャルワークの仕事は、社会は一生の仕事として誇りに持つことができる」、「私自身の強い意志で選んだ」がそれぞれ2.26±1.03、2.19±1.08であることから、入学時において人生の選択として当該コースを、強い本人の意志で選択していた。

3.2.3 様々な行動に対する価値

結果を表6に示した。「私は、裕福で、お金と高価な品物とをたくさん持つことが大切な人である」、「私は、周囲の人を助けて、幸せにすることが大切な人である」の平均値±SDは、それぞれ4.45±1.25、2.49±1.16であったことから、学生は高価なものへの執着が必ずしも高くないということや、周囲の人の相談援助をすることに関心が高かった。

3.3 諸変数の国別比較

国によって諸変数に違いがあるかどうかを、一元配置分散分析によって分析を行った。統計学的に有意差がみられた変数に関しては、Tukey HSDによる多重比較（下位検定）を行った。以下、多重比較において、米国と日本、英国と日本を比較し統計学的な有意差がみられた変数の中のいくつかの変数に限定して言及する。尚、各表は、煩雑になるのを避けるために、統計学的に有意差がみられた変数のみを記載した。

3.3.1 大学を選択した理由の国別比較

結果を表7に示した。「望んでいた学びができると思った」について、他国に比べて日本の学生の方は、そうは思っていないかった。「この大学の良い評判があった」について、日本の学生は特に米国の学生に比べて評判をあまり意識していなかった。「授

表4 大学を選択した理由

質問項目	度数(人)	平均値	SD
望んでいた学びができたと思った I could study the exact course I wanted to.	1301	1.90	.92
家族あるいは友人が勧めてくれた A family member or friend recommended it to me.	1298	3.16	1.32
高校の先生などが勧めてくれた A teacher or advisor recommended it to me.	1295	3.28	1.34
私自身の判断でこの大学を選んだ I chose this university based on my own judgment. It has a good academic reputation.	1299	1.78	.96
この大学の良い評判があった It has a good academic reputation.	1299	2.45	1.01
授業料が手ごろな額であった It has reasonable tuition fees.	1296	3.47	1.21
家から通学できる距離である I can commute from home.	1300	2.66	1.56
卒業生の就職率が良かった It has high employment rates for graduates.	1294	2.50	1.03
オープンキャンパスに参加し、印象づけられた I attended an open day and was impressed.	1298	3.10	1.38
大学のパンフレットや広告に、印象づけられた I was impressed by the university brochure and advertising.	1296	3.05	1.19
ケアを必要としている人がいるので、近くにいないといけない I have care giving responsibilities, so need to be close by.	1294	3.84	1.30
特別な理由はなかった I had no particular reason.	1294	3.52	1.70
本当はこの大学には入りたくなかった I didn't really want to come here.	1144	4.06	1.15

表5 ソーシャルワークコースを選択した理由

質問項目	度数(人)	平均値	SD
自分の能力に適していた It suited my skills.	1275	2.65	.99
自分の性格に合っていた It suited my character.	1276	2.40	.99
社会に貢献できる仕事があった I wanted to help society.	1275	1.92	.96
ソーシャルワーカーになりたかった I wanted to become a social worker.	1275	2.33	1.11
ソーシャルワーカーの仕事は、高い満足感が得られる Social work offers high levels of job satisfaction.	1273	2.59	.99
ソーシャルワーカーには、昇進のチャンスが多くある Social work offers good opportunities for promotion.	1273	3.22	.95
ソーシャルワーカーの給料が良かった Social work pays well.	1272	3.76	.92
ソーシャルワークの仕事は、社会から尊敬されている Social work is respected in society.	1270	2.99	.98
ソーシャルワークの仕事は一生の仕事として誇りに持つことができるから I can be proud of my career.	1270	2.26	1.03
社会福祉サービスから支援を受けている人を知っていた I knew someone who benefit from the help of social services.	1271	3.00	1.26
ソーシャルワーカーと話した経験があり、感銘を受けた I spoke with professional social workers and was impressed.	1273	3.47	1.27
この学科を卒業すると高い割合で就職できる This course has high employment rates for graduates.	1266	3.02	1.05
家族や友人が勧めてくれた A family member or friend recommended it to me.	1271	3.28	1.24
高校の先生などが勧めてくれた A teacher or advisor recommended it to me.	1270	3.43	1.25
私自身の強い意志で選んだ I chose this course based mainly on my own judgment.	1271	2.19	1.08
オープンキャンパスに参加し、印象づけられた I attended an open day and was impressed.	1270	3.23	1.33
この学科は実習に関して評判が良かった This program's field course has a good reputation for practical placements.	1257	3.00	1.02
この学科に入ることに特別の理由はなかった I had no particular reason to study this course.	1265	3.61	1.26
特にソーシャルワークを学びたいとは思ってはいなかった I chose this course even though I didn't really want to study social	1265	3.75	1.24

表6 様々な行動に対する価値

質問項目	度数(人)	平均値	SD
私は、新しいアイデアを考えつき、創造的であること、自分のやり方で行うことが大切な人である It is important to me to think up new ideas and be creative; to do things my own way.	1280	3.08	1.33
私は、裕福で、お金と高価な品物をたくさん持つことが大切な人である It is important to me to be rich; to have a lot of money and expensive things.	1284	4.45	1.25
私は、安全な環境に住むこと、危険なことはすべて避けることが大切な人である Living in secure surroundings is important to me; to avoid anything that might be dangerous.	1279	3.29	1.29
私は、楽しい時間を過ごすこと、自分を「甘やかす」ことが大切な人である It is important to me to have a good time; to "spoil" myself.	1278	3.62	1.28
私は、周囲の人を助けて、幸せにすることが大切な人である It is important to me to help the people nearby; to care for their wellbeing.	1281	2.49	1.16
私は、大いに成功すること、成し遂げたことを人に認められることが大切な人である Being very successful is important to me; to have people recognize my achievements.	1281	3.06	1.27
私は、冒険し、リスクを冒すこと、刺激のある生活が大切な人である Adventure and taking risks are important to me; to have an exciting life.	1279	3.74	1.36
私は、常に礼儀正しくふるまうこと、間違っているとされそうな行動を一切避けることが大切な人である It is important to me to always behave properly; to avoid doing anything people would say is wrong.	1280	3.34	1.25
私は、環境に気を使うこと、自然へ配慮することが大切な人である Looking after the environment is important to me; to care for nature.	1283	3.02	1.20
私は、伝統や、宗教や家族によって受け継がれてきた慣習に従うことが大切な人である Tradition is important to me; to follow the customs handed down by my religion or family.	1286	3.84	1.40

表7 大学を選択した理由の国別比較

	国	度数(人)	平均値	SD	F 値	
望んでいた学びができたと思った	米国	132	1.73	0.72	F _{2,1298} =5.697,p<.01	*] *
	英国	59	1.63	0.79		
	日本	1110	1.94	0.94		
家族あるいは友人が勧めてくれた	米国	132	2.86	1.10	F _{2,1295} =5.605,p<.01	*] **
	英国	57	3.51	1.30		
	日本	1109	3.18	1.34		
高校の先生などが勧めてくれた	米国	131	2.94	1.07	F _{2,1292} =10.325,p<.01	*] **
	英国	54	3.91	0.92		
	日本	1110	3.29	1.37		
この大学の良い評判があった	米国	132	1.93	0.74	F _{2,1296} =19.686,p<.01	*] **
	英国	58	2.48	0.94		
	日本	1109	2.51	1.03		
授業料が手ごろな額であった	米国	132	2.24	0.94	F _{2,1293} =88.491,p<.01	*] **
	英国	55	3.29	1.01		
	日本	1109	3.63	1.16		
家から通学できる距離である	米国	132	1.79	1.08	F _{2,1297} =26.705,p<.01	*] **
	英国	58	2.47	1.52		
	日本	1110	2.77	1.51		
卒業生の就職率が良かった	米国	131	2.54	0.82	F _{2,1291} =5.978,p<.01	*] **
	英国	53	2.96	0.59		
	日本	1110	2.47	1.07		
オープンキャンパスに参加し、印象づけられた	米国	132	3.32	0.90	F _{2,1295} =3.652, p<.05	
	英国	56	2.73	1.14		
	日本	1110	3.10	1.43		
ケアを必要としている人がいるので、近くにいないといけない	米国	132	3.24	1.23	F _{2,1291} =27.886, p<.01	*] **
	英国	56	3.27	1.56		
	日本	1106	3.94	1.15		
特別な理由はなかった	米国	130	3.78	0.95	F _{2,1291} =2.815,p=N.S.	
	英国	55	3.56	1.27		
	日本	1109	3.49	1.33		
本当はこの大学には入りたくなかった	米国	130	4.31	0.89	F _{2,1141} =5.662, p<.01	*]
	英国	51	4.35	0.93		
	日本	963	4.01	1.19		

注 1) 各変数はペアワイズによる欠損値の除去を行った。
 注 2) 多重比較には Tukey HSD を用いた。*:p<.05 **:p<.01

業料が手頃な額であった」について、特に日本の学生は、大学選択において授業料を意識していなかった。「家から通学できる距離である」について、日本の学生は他国の学生よりも自宅（実家）からの距離を大学選択において考慮していなかった。以上から、日本の学生の方が他国の学生よりも幅広い選択の中から大学を選択していた可能性が考えられる。

3.3.2 ソーシャルワークコースを選択した理由の国別比較

結果を表8に示した。「自分の能力に適合していた」、「自分の性格に合っていた」、「社会に貢献できる仕事があった」、「ソーシャルワーカー

になりたかった」、「ソーシャルワーカーの仕事は、高い満足感が得られる」、「ソーシャルワーカーと話した経験があり、感銘を受けた」のすべての項目に関して、日本の学生は他国の学生よりも「そうではない」と考えていた。これらから相対的ではあるが、日本の学生はSWrになること自体への動機が低いということ、また社会への貢献度や期待される仕事への満足度、実際のSWrとの出会いから生じた経験という点から、社会の中でのSWrの位置づけが明確でない可能性が示唆される。

このことは「私自身の強い意志で選んだ」についても日本の学生が他国の学生より低いことからわ

表8 ソーシャルワークコースを選択した理由の国別比較

	国	度数(人)	平均値	SD	F 値	
自分の能力に適合していた	米国	132	1.60	.55	F _{2,1272} =137.538,p<.01]**]**
	英国	59	1.80	.58		
	日本	1084	2.83	.95		
自分の性格に合っていた	米国	132	1.44	.49	F _{2,1273} =102.349,p<.01]**]**
	英国	60	1.73	.52		
	日本	1084	2.55	.98		
社会に貢献できる仕事があった	米国	132	1.40	.55	F _{2,1272} =26.399,p<.01]**]**
	英国	59	1.63	.55		
	日本	1084	2.00	.99		
ソーシャルワーカーになりたかった	米国	132	1.78	.77	F _{2,1272} =39.393,p<.01]**]**
	英国	60	1.53	.65		
	日本	1083	2.44	1.13		
ソーシャルワーカーの仕事は、高い満足感が得られる	米国	132	2.36	.82	F _{2,1270} =7.328,p<.01]**]**
	英国	60	2.28	.85		
	日本	1081	2.63	1.02		
ソーシャルワーカーには、昇進のチャンスが多くある	米国	132	2.84	.87	F _{2,1270} =27.159,p<.01]**]**
	英国	58	2.60	.70		
	日本	1083	3.30	.95		
ソーシャルワーカーの給料が良かった	米国	132	4.02	.83	F _{2,1269} =11.402,p<.01]**]**
	英国	58	3.34	1.09		
	日本	1082	3.75	.92		
ソーシャルワークの仕事は、社会から尊敬されている	米国	131	2.92	1.05	F _{2,1267} =13.688,p<.01]**]**
	英国	58	3.66	1.09		
	日本	1081	2.97	.98		
ソーシャルワークの仕事は一生の仕事として誇りに持つことができる	米国	130	1.65	.62	F _{2,1267} =29.445,p<.01]**]**
	英国	58	1.97	.70		
	日本	1082	2.34	1.06		
社会福祉サービスから支援を受けている人を知っていた	米国	131	2.27	.98	F _{2,1268} =26.812,p<.01]**]**
	英国	59	2.81	1.20		
	日本	1081	3.10	1.27		
ソーシャルワーカーと話した経験があり、感銘を受けた	米国	132	2.44	.92	F _{2,1270} =62.973,p<.01]**]**
	英国	59	2.88	1.15		
	日本	1082	3.62	1.25		
この学科を卒業すると高い割合で就職できる	米国	130	2.78	.83	F _{2,1263} =4.637,p<.01]**]**
	英国	57	2.88	.89		
	日本	1079	3.05	1.08		
家族や友人が勧めた	米国	132	2.92	.95	F _{2,1268} =6.211,p<.01]**]**
	英国	57	3.23	1.10		
	日本	1082	3.32	1.27		
高校の先生などが勧めた	米国	132	2.92	1.05	F _{2,1267} =12.64,p<.01]**]**
	英国	57	3.40	.92		
	日本	1081	3.49	1.28		
私自身の強い意志で選んだ	米国	132	1.79	.79	F _{2,1268} =14.08,p<.01]**]**
	英国	57	1.86	.79		
	日本	1082	2.26	1.11		
オープンキャンパスに参加し、印象づけられた	米国	131	3.41	.86	F _{2,1267} =3.482,p<.01]**]**
	英国	57	2.86	1.19		
	日本	1082	3.22	1.38		
この学科は実習に関して評判が良かった	米国	131	2.52	.84	F _{2,1254} =17.186,p<.01]**]**
	英国	57	2.96	.93		
	日本	1069	3.07	1.03		
この学科に入ることに特別の理由はなかった	米国	132	4.06	.87	F _{2,1262} =16.881,p<.01]**]**
	英国	57	4.18	1.05		
	日本	1076	3.53	1.29		
特にソーシャルワークを学びたいと思っていなかった	米国	130	4.29	.87	F _{2,1262} =25.066,p<.01]**]**
	英国	56	4.43	.89		
	日本	1079	3.65	1.27		

注 1) 各変数はペアワイズによる欠損値の除去を行った。

注 2) 多重比較には Tukey HSD を用いた。*:p<.05 **:p<.01

かる。また「この学科に入ることに特別な理由がなかった」、「特にソーシャルワークを学びたいと思っははなかった」が、全体的には、「そうである」と考えていないまでも、日本の学生は他国の学生よりも、その考えは強かった。

3.3.3 様々な行動に対する価値の国別比較

結果を表9に示した。「私は、新しいアイデアと考えつき、創造的であること、自分のやり方で行うことが大切な人である」について、日本の学生は他国の学生よりも、そうは考えてははなかった。このことから、自主性、創造性という面で日本の学生の自己評価は他国の学生よりも低い。「私は、周囲の人を助けて、幸せにすることが大切な人である」について、日本の学生は他国の学生より、そうは考えてははしない。このことから、他者をサポートするという想いが他国の学生よりも低かったことが示唆された。

4. 分析

大学やソーシャルワークコースを選択した理由から、日本の学生は他国の学生に比べて、大学を選択した必然性、積極性が相対的に低い傾向にあることがわかる。これは、他国の教育事情が大きく反映するので安易に国別比較はできない。というのも、他国では日本に比べて、学部教育が基礎的なものであり、SWrになるためには大学院に進学する必要が制度的、社会的に必要だからである。一方、日本では多くは学部教育の修了、つまり学士号がSWrとして

社会福祉士を取得するための条件であり、大学院への進学は必要不可欠なものではない。つまり、現在、所属する教育機関を修了することが、SWrになるための条件であるという意味で、他国と日本の学生が置かれている状況は同等であるとも考えることも可能である。

では実際に同等と見なせるのだろうか。本質問紙調査を実施する際、A大学、B大学の教員からはSWrの専門教育における修士教育の重要性が強調された。つまり、SWrの専門職教育は修士教育であるいえる。その一方で、日本では、大学院レベルでのSWr教育の必要性が、たとえば日本社会福祉士養成校教育協会や日本社会福祉学校連盟から提起されることはあるが、SWrになるための教育は学部教育の中で完結している。以上から、SWrになるための専門職教育は、米国、英国では大学院であり、日本では学部である可能性がある。

ソーシャルワークコースを選択した理由のなかで、仕事に対する満足感をみた時、日本の学生が他国の学生よりも期待をしていないと解釈できる。米国や英国ではSWrであることで、満足感を得られること、また社会への貢献が期待され、それらに対して自身の性格や能力が適格的であると学生は感じている。さらには、実際のSWrと話した経験があるかどうかは、SWrが将来の役割モデルになる可能性を持っている。以上のことは、日本社会においては充分ではないと考える。つまり、卒業後の自身の進路に対する明確なビジョンの提示が、日本の社会の中

表9 様々な行動に対する価値の国際比較

	国	度数(人)	平均値	SD	F 値	
私は、新しいアイデアを考えつき、創造的であること、自分のやり方で行うことが大切な人である	米国	132	2.14	.99	F _{2,1277} =48.182,p<.01]**]**
	英国	51	2.45	1.03		
	日本	1097	3.23	1.33		
私は、裕福で、お金と高価な品物をたくさん持つことが大切な人である	米国	132	4.67	1.07	F _{2,1281} =3.278,p<.05	
	英国	53	4.64	1.04		
	日本	1099	4.41	1.28		
私は、周囲の人を助けて、幸せにすることが大切な人である	米国	132	1.75	.68	F _{2,1278} =47.795,p<.01]**]**
	英国	54	1.76	.88		
	日本	1095	2.62	1.17		
私は、大いに成功すること、成し遂げたことを人に認められることが大切な人である	米国	132	3.29	1.23	F _{2,1278} =3.89,p<.05	
	英国	53	3.34	1.33		
	日本	1096	3.02	1.27		
私は、冒険し、リスクを冒すこと、刺激のある生活が大切な人である	米国	131	3.03	1.43	F _{2,1276} =25.083,p<.01]**]**
	英国	53	3.26	1.44		
	日本	1095	3.84	1.32		
私は、環境に気を使うこと、自然へ配慮することが大切な人である	米国	132	2.58	1.19	F _{2,1280} =9.806,p<.01]**
	英国	54	3.02	1.19		
	日本	1097	3.07	1.20		
私は、伝統や、宗教や家族によって受け継がれてきた慣習に従うことが大切な人である	米国	132	3.02	1.37	F _{2,1283} =26.563,p<.01]**]**
	英国	54	3.98	1.34		
	日本	1100	3.94	1.37		

注 1) 各変数はペアワイズによる欠損値の除去を行った。
 注 2) 多重比較には Tukey HSD を用いた。*:p<.05 **:p<.01

では不明瞭である可能性が高い。将来のビジョンが明確になることで、SWrになるために必要な適性がある程度、明示される可能性が高くなり、大学選択やコース選択における重要な要素となりえると考えられる。

さて、様々な行動に対する価値をみた時、日本の学生は他国の学生よりも自主性、創造性が高くないと考えていた。これから日本の学生の方がそれらの能力が乏しいとは判断できず、またソーシャルワークの学生のみの価値であるとはいえない。同様に、他者をサポートするという意識にもいえる。但し先に述べたことを踏まえると、たとえば他国の学生は、他者を自主的に、また創造的な視点から人をサポートする能力がソーシャルワークには必要だと考えており、自身がその能力を備えているからソーシャルワークコースを選択しているともいえる。

5. 結論及び今後の課題

本調査において、SWrの専門職課程に所属する学生を比較したところ、他国の学生は、将来、SWrになることが社会への貢献につながり、またそれに満足を得ることがわかった。また日本の学生は、他国の学生よりもSWrに対する役割モデルが欠如している可能性も示唆された。

学部、大学院を問わず専門課程の中で役割モデルが明確であるということは、卒業後の「出口」がある程度保証され、また明確であることにつながる。事実、他国の学生はその「出口」や役割モデルにあわせて、「入口」である大学及びコースの選択を行っていた。このことから、日本のソーシャルワーク教育において、「出口」の明確化と保証、それに

あわせた「入口」から「出口」までのビジョンの明確化が必要となるであろう。但し、「入口」と「出口」がいわば一直線に並ぶことは、進路の固定化につながりかねない。この是非は別途、議論すべきであろう。いずれにせよ、学部教育と修士教育の違いがあるとはいえ、その課程を修了した後の役割モデルがあるかどうかは重要な問題ではないか。

本稿での分析は、SWr養成のあり方を探るための端緒にしかならない。今後、社会福祉系大学以外に属する学生との比較が必要となる。また社会福祉士の実習や具体的なカリキュラムの比較検討、政治的、宗教的な態度を踏まえた分析も残されている。

分析上の課題として、分析対象が日本が主に学部教育であるのに対して、他国が大学院教育であること、そのため回答者の年齢層が異なるという点を充分考慮しなければならない。本稿で明らかにしたことを基礎として、本研究ではA大学、B大学以外の海外の大学での追加調査を予定している。その折りには学部学生の十分な標本が得られ予定であり、本稿の問題点はある程度、解決されると考える。但し、学部教育が基礎で修士教育が専門であるといういわば一枚岩の理解ではなく、SWrの専門教育がどの課程で行われているかを十分に理解した上での国際比較を検討する必要がある。そのためにはSWrの専門性もしくは専門教育の内容の理解も必要となろう。

本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）「医療ソーシャルワーカーの教育養成に関する国際比較研究」（課題番号：21402037、研究代表者 熊谷忠和）の補助金を受けたものである。

文 献

- 1) 日本社会福祉士養成校協会：相談援助演習教員テキスト。初版、中央法規出版、東京、1-239、2009。
- 2) 日本社会福祉士養成校協会：相談援助実習指導・現場実習教員テキスト。初版、中央法規出版、東京、1-302、2009。
- 3) 日本社会事業大学社会事業研究所：アジアのソーシャルワーク教育。初版、学苑社、東京、1-180、2007。
- 4) 平山尚：アメリカにおける社会福祉教育－歴史的発展と現況。ソーシャルワーク研究、30(2)、相川書房、10-18、2004。
- 5) 寶田玲子：ソーシャルワーク実習教育に関する一考察。アメリカのソーシャルワーク実習教育プログラムの比較研究から。関西福祉科学大学紀要、13、関西福祉科学大学、5-67、2010。
- 6) 横山壤：ソーシャルワーク研究における国際比較の意義。ソーシャルワーク研究、25(4)、相川書房、354-361、2000。
- 7) 真鍋一史：通文化比較調査および国際比較調査の方法論的課題-調査の等価性の問題を中心に。法学研究、77(1)、538-504、2004。
- 8) 真鍋一史：通文化比較調査および国際比較調査の方法論的課題 等価性確立のための方法の開発。関西学院大学社会学部紀要、96、95-110、2004。
- 9) 電通総研、日本リサーチセンター：世界主要国価値観データブック。初版、同友会、東京、1-255、2008。

(平成22年11月22日受理)

**Tripartite Study of Social Worker's Education –Differences among American,
British and Japanese University Students' Sense of Values–**

Shinji INOUE and Tadakazu KUMAGAI

(Accepted Nov. 12, 2010)

Key words : International comparison, Social work, Students' sense of values

Correspondence to : Shinji INOUE

Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail : inoshin@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.20, No.2, 2011 427–435)